

# 「努力主義」の衰退と「親ガチャ」

寺地 幹人

茨城大学人文社会科学野准教授

## はじめに

2021年、「親ガチャ」という言葉がユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされ(株式会社ユーキャン 2021)、また大辞泉新語大賞に選ばれた(小学館 2021)。これは、親や生まれ育った家庭を子どもは選べないが、そうした親や家庭の状況が人生を左右するということを、ガチャ(カプセルトイの販売機もしくは携帯電話のゲームでランダムにアイテムを獲得する仕組み)にたとえて表現した言葉である。この「親ガチャ」という言葉が流行した要因の一つには、本人の努力に価値をおく「努力主義」の衰退と、本人の努力では生まれや育ちの影響を覆しがたいという考えに対する人々の支持が考えられる。

本稿では、以上のような「努力主義」の衰退について論じた寺地(2025)の内容の一部を概略的に紹介したうえで、「親ガチャ」の時代を生きる若者の現状について、考察してみたい。

### てらち みきと

東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。修士(学術)。専門分野は、社会学。国際大学 GLOCOM 研究員/助教、茨城大学人文学部・人文社会科学部講師を経て現職。

著書に『リフレクシブ・ライブズ』(2025年・近刊、勁草書房、分担)、『最近の大学生』の社会学』(2024年、ナカニシヤ出版、共著)、『現代若者の幸福』(2016年、恒星社厚生閣、分担)など。

## 平成時代30年間を通じた変化

寺地(2025)ではまず、平成時代の約30年間を経て「努力主義」に対する支持がどのように変わってきたのか、以下のように確認している。

日本社会において、本人の努力が成功につながるという価値観に対する疑義は、最近に始まったことではない。例えば、2000年代になってからの格差社会論の盛り上がり、そしてロスジェネ世代の若者の貧困・労働問題に対する世間の注目は、本人の努力だけではどうしようもしがたい構造的な問題あるいは環境的な要因を無視できないという理解を、一定程度、日本社会に形成したといえよう。

ここで留意したいのは、現在の令和の「親ガチャ」論に比べて2000年代は、構造的な問題への対応の前提に、努力することへの支持や努力できる環境の獲得が多少なりとも想定されていたという点である。2000年代は、昭和的な努力主義は支持されなくても、「ハイテンションな自己啓発」のような躁状態と「宿命論」への陥落という鬱状態を行き来しつつであるが(鈴木 2005)、やりたいことに向かい自分自身が邁進すること自体は支持されていた。一方で2020年代の今日、「ハック」(システムを逆用したり効率化するテクニック)、「コスパ」(費用対効果)、「チート」(いかさま、ずる)という言葉が説得力をもつ(朝日新聞 2024)。コツコツ積み上げる努力よりも要領の良さや効率が支持され、結果として成果

と報酬が得られれば、自分自身で何かを成し遂げることは重要ではない。

もう1点、2000年代の格差社会論の困難と「親ガチャ」時代に語られる苦境の違いには、社会の個人化の問題がかかわると考えられる。格差社会論においては「勝ち組」と「負け組」の分断が問題視されたが、それは「組」という集団の間の格差である。一方で「親ガチャ」は、その言葉の由来であるゲームのガチャがスマホの画面に一人で向き合って引くものであるように、個々人の生育環境や家庭の内部で生じる問題を表す語彙として想定される。例えば、虐待・DVや毒親といった問題は、家庭の外からは見えにくいことやそれへの介入の難しさに特徴がある。そして、このような自らの苦境について「自分だけが抱える問題ではないかもしれない」という想像力を個々人がもちにくいことが、社会の個人化に起因する課題の一つだといえよう。

ファーロングとカートメル（2007=2009）は、個人主義的価値観の浮上の中で階級などの社会構造が見えにくくなった結果、「人々は、社会や世界が予測不可能で危険に満ちたものとなり、それはひとえに個人レベルでしか克服していけないかのようにみなすようになる」（Furlong and Cartmel 2007=2009: 12）と述べる。個人化の進展に伴う課題の一つは、本人の努力だけではどうしようもしたい状況への対応が個人の内側に向いてしまうことをいかに克服するかということだと、考えられる。

## データで確認する「努力主義」の衰退

以上のような変化について、寺地（2025）では、データを用いて具体的に検討している。分析に用いているのは、青少年研究会が1992年から10年おきに実施してきた調査票調査のデータである。この調査は16～29歳の大都市の若年層を対象としたものだが、2012年からは中年層も同様の枠組みで対象にし、また2022年には大都市だけでなく全国の若年層も対象にしている<sup>1</sup>。

分析する質問項目は、「あなたは、現在の日本の社会で経済的に成功するのに重要なものは何だ

と思いますか」という質問に対する回答で、4つの選択肢「生まれ育った家庭の環境」「個人の才能」「個人の努力」「運や偶然」（以降、「家庭」「才能」「努力」「運」と表記）に順位を付ける方式となっている。この質問項目は、2002年と2012年、そして最新の2022年の3回の調査で尋ねられている<sup>2</sup>が、2012年までの調査の分析の概要は以下の通りとなっている。

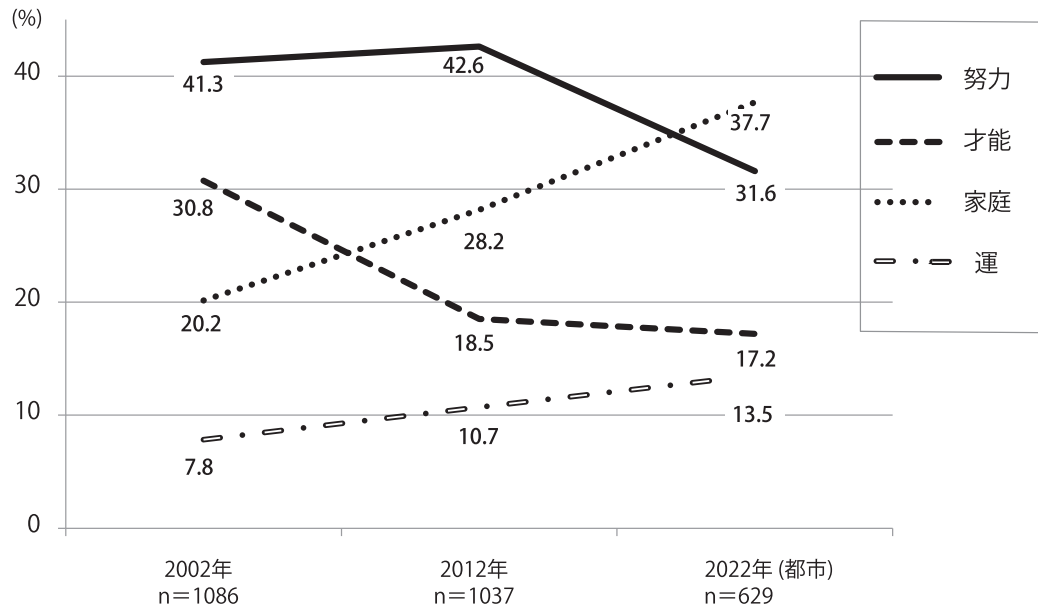
まず、同じ質問形式ではないものの類似の内容の項目を1992年調査データによって分析した藤村（1995）は、個人の「努力」に対する支持が最も高いことよりも、他国に比して「運やチャンス」といった偶然要因に対する支持が相応にあること、偶然要因への支持が安定していることに下支えされた「〈結果の問われない〉努力主義」の存在を指摘している。続いて、2002年調査データを分析した浜島（2004）は、「努力」を支持する傾向が弱まって「才能」を支持する考え方が台頭してきているという見立てを示した。そして、2012年調査データを2002年調査データと比較して分析した寺地（2015）（2016）は、「努力」支持が2002年と2012年の間で大差がなかったものの、2002年にみられた「才能」支持の傾向は衰退し、「家庭」を重要だと考える傾向が出始めていることを示した。

このような「家庭」支持の傾向の出現は、2020年代になってからの「親ガチャ」概念の流行の下地になっていた可能性がある。すなわち、「親ガチャ」は2021年の流行語だが、それが流行するような社会意識が平成時代の約30年間をかけて醸成されてきたということが考えられる。

そして以下の図1が、最新の2022年調査のデータを加えた3時点の回答分布である<sup>3</sup>。傾向をより簡素に理解するため、1番目に重要視する要因の割合のみ示している。

注目したいのは、2012年と2022年の間で1位と2位が入れ替わった点である。2012年には「努力」が2002年とほぼ同程度のポイントで1位だったが、2022年では10ポイント以上減少して2位になった。対して、2012年で2位（28.2%）だった「家庭」が、2022年には1位（37.7%）になった。

図1 経済的成功に1番目に重要だと考える要因の推移



出所:寺地(2025)

また、2002年と2012年で値が大きく異なった「才能」に関しては、2012年と2022年の間でさほど値に違いはない。

このように、2012年と2022年の間で、「努力」を支持する成功観が衰退しており、「家庭」を支持する成功観の台頭がますます顕著になっている。ただし、2022年の全国の若年層を対象とした調査データでは、「努力」(35.8%)と「家庭」(35.6%)の値にほぼ差はなく順位の入替わりもないことから(図省略、n=910)、2012年から2022年にかけてのこうした変化は、都市部でより顕著に起きている可能性がある。

## 要因のパターンの分析 および社会的属性とのクロス分析

以上のような調査対象の全体的な分析に加え、寺地(2025)では、支持する成功要因4つの順位付けのパターンの分析と、社会的属性(性別、年齢、職業、本人学歴、父学歴、母学歴)とのクロス分析を行っている。

前者のパターンの分析では、支持する要因1番目と2番目を組み合わせたパターン12個につい

て、3回の調査での割合の変化を確認している(寺地 2025) 4。2002年と2012年は「努力」1番・「才能」2番というパターンが12個のうち唯一2割を超えて最も多かったが、2022年は「家庭」1番・「努力」2番のパターンが14.8%で最も多くなった(次いで多いのが「努力」1番・「才能」2番で13.4%、3番目に多いのが「家庭」1番・「才能」2番で12.4%)。また、3時点それぞれにおけるポイント間の標準偏差(ばらつきの度合い)を確認すると、時代を経るほどに、それが小さくなっていった。これらのことから、特定のパターンに回答が集中するのではなく、若者の中で価値観が多様化し分散してきている状況が見えてきた。

後者のクロス分析について、寺地(2025)では、3つの時点ごとに1番目に支持する要因と各社会的属性の関連を $\chi^2$ 乗検定で確認している。その結果、2002年時点では、いずれの社会的属性とも統計的に有意な関連は確認できなかった。一方で2012年は、性別、年齢層、母学歴との間に統計的に有意な関連(5%水準)が確認された<sup>5</sup>。このように2012年は複数の社会的属性でカテゴリー間に有意差が確認されたが、2022年において有意な関連(5%水準)が確認されたのは、性別のみだった。

これらの結果から、2012年にはある特定の属性の人たちには「努力」への支持とそれに伴う「家庭」支持の相対的な低さがあったことと、2022年は2012年に比べて、ほぼ属性によらず「努力」支持の低下と「家庭」支持の台頭を、見て取れる。かつて荻谷(2001)が意欲格差(インセンティブ・ディバイド)と呼んだような、あるいは山田(2004)が「希望格差」と呼んだような、個人が「努力」できる前提の格差が問題視されたが、今や「格差」ではなく、あらゆる人たちにとっての「努力」支持が衰退してきているのが現状だといえよう。

### 年齢層および世代を踏まえた分析

ここまでは寺地(2025)をもとに、「努力主義」の衰退と「親ガチャ」的な価値観の台頭をみてきたが、最後に、こうした傾向がいわゆる「若者」特有のものか検討してみたい。

検討の前に留意点を確認すると、第1に、「若者」という存在は時代や文脈により異なって定義される。ただし最近の説明の例を挙げるならば、政策的な説明として内閣府の子ども・若者育成支援推進本部(2021)では、以下のように記している。

青年期(おおむね18歳からおおむね30歳未満まで)の者。施策によっては、ポスト青年期の者(青年期を過ぎ、大学等において社会の各分野を支え、発展させていく資質・能力を養う努力を続けている者や円滑な社会生活を営む上で困難を有する、40歳未満の者)も対象とする。(子ども・若者育成支援推進本部 2021: 1)

これを参照し年齢で考えると、狭義には30歳未満、広義には40歳未満となる。

第2に、年齢と世代との区別に留意したい。浅野(2024a)は、ある時点の年齢によって定義される「若者」と出生時点によって定義される「世代」を整理し、「人びとは、成長するにつれて『若者』ではなくなっていくが、生涯にわたって同じ『世代』(出生コホート)に属する」(浅野 2024a: 241-242)と述

図2 「努力」支持の割合(%)

生年	2002年調査	2012年調査	2022年調査
2002			
2001			
2000			
1999			都市
1998			20～
1997			29歳
1996			38.7
1995			n=445
1994			
1993			
1992			
1991			
1990			
1989		20～	都市
1988		29歳	30～
1987		46.5	39歳
1986		n=718	39.8
1985			n=181
1984			
1983			
1982			
1981			
1980			都市
1979	20～	30～	40～
1978	45.0	39歳	49歳
1977		44.9	37.7
1976	n=773	n=301	n=223
1975			
1974			
1973			

出所: 青少年研究会 2002・2012・2022年調査より筆者作成

べている。ある時点での「年齢」集団は、同時にその時点での年齢数を遡った年に生まれた「世代」という集団なのである。しかしながら同時に、「本来世代論とは出生時点から消滅時点まで一貫して論じるものであるべきだが、多くの世代論は各世代が若い時期の特徴に注目しがちである」(浅野 2024a: 246)と指摘されるように、世代論(ある特定の世代についての記述や議論)と若者論の近さないし重なりがある。若い時期に培った価値観がその世代を特徴づけると考えられているからなど、対象として記述・議論される際の近さないし重なるの理由はいくつか考えられるが<sup>6</sup>、いずれにせよ年齢と世代とい

う2つの観点は、概念上は区別して理解しておく必要がある。

以上を踏まえたうえで、本節冒頭で述べた傾向を確認する。今回用いているデータにおいて10歳刻みで比較可能な年齢層・世代について、図2の通り、「努力」支持の割合を示した(それ以外の年齢層・世代は非表示)<sup>7</sup>。

「若者」を前述の狭義の定義で設定するならば29歳以下ということになるが、20～29歳について、2002年と2012年の割合は40%台半ばとほぼ同程度だが、2022年では30%台と低くなっている。これが統計的に有意な低さかどうか今回は検討することが難しいため断定はできないが、2002年・2012年と2022年では、状況に違いがありそうだ。

また、20～29歳の割合が他の年齢層の割合と異なるかどうか、すなわち「若者」特有かどうかという点について、2012年も2022年も、その時点の他の年齢層と割合はほぼ違いがない。これについても統計的に有意な差か確認できていないが、「若者」特有の結果になっているとは言い難いだろう。

世代という観点については、1973～1982年生まれの世代と1983～1992年生まれの世代、ともに年齢が上がるほどに「努力」支持の割合は低くなるが、1973～1982年生まれの世代の20代(2002年)と30代(2012年)の割合の違いがほとんどないのに対し、1983～1992年生まれの世代の20代(2012年)と30代(2022年)の割合の違いは数ポイントある。

以上から、「努力主義」の衰退と「親ガチャ」的な価値観の台頭は「若者」特有の傾向というよりも、2000年代の現在、30・40代にも同様に確認できる傾向であることがわかる<sup>8</sup>。

## まとめ

ここまでの検討をもとに、「親ガチャ」の時代を生きる若者の現状について示唆されるのは、以下の点である。それは、「努力主義」の衰退や「親ガチャ」

的な価値観の台頭が冒頭で述べたような社会構造に対する見通しの悪さにつながるとするならば、それは「若者」だけが抱える問題ではなさそうであるということである。この問題について何か対応を考える場合、年齢や世代で区切った対応の難しさがあるといえるが、同時に、そうした困難についてまず理解する際に年齢や世代を超えてそれをしやすい可能性があるともいえる。

あらゆる社会的属性や年齢・世代に、偶発的に困難が生じている場合、自らの置かれている立場や状況について、再帰的かつ社会構造に結びつけての理解が難しい。しかしながら、立場や状況を超えて同様の理解がしやすい状態から、合意形成ないし連帯の契機を考えていくこともできるかもしれない。■

### 《注》

- 1 調査概要の詳細は、青少年研究会(2024)および辻・浅野編(2025)を参照。なお、最新の2022年調査は、JSPS 科研費JP19H00606(研究代表:浅野智彦)の助成を受けて実施された。
- 2 複数回の調査データを比較するため、「経済的成功」を尋ねることを変えずに質問を設計しているが、今日、「成功」には以前にも増して多様な形や基準が存在するだろう点には、留意が必要である。
- 3 2022年調査に関しては、それ以前2回と対象を揃えるために、大都市の若年層に限定して結果を示している。
- 4 1～4番目を組み合わせたパターン24個の表は、寺地(2024)を参照。
- 5 関連の仕方の詳細については、寺地(2025)の説明を参照。
- 6 このような若い時期の特徴で世代を捉えることについて、それが難しくなってきたことを、世代の違いに準拠した世代論の困難や発達段階の段差の世代差といった観点から、浅野(2024a)は示している。
- 7 経済的成功の要因1～4位について、「努力」が「家庭」および「才能」より上位だった場合の割合。詳細は、寺地(2025)の問題設定(2)の分析部分を参照。
- 8 この点について、今回の分析から年齢効果や世代効果ではなく時代効果によるものだと判断することには慎重でありたい。詳細は、浅野(2004b)の注6およびそこで言及している太郎丸(2022)を参照。

## 《参考文献》

- 朝日新聞 (2024) 「衰退した努力神話と自己責任論—ハックとチートの時代、救いと危うさ」, 朝日新聞デジタル 2024年2月15日, (2024年2月15日取得, <https://www.asahi.com/articles/ASS2F6RD5S10UCVL00P.html>).
- 浅野智彦 (2024a) 『「若者」とは誰か—アイデンティティの社会学』河出書房新社.
- (2024b) 「ロスジェネとは誰のことか」『世界』981: 192-199.
- 藤村正之 (1995) 「生得：努力：偶然 = 3:5:2—何が人生を決めるのか」川崎賢一・芳賀学・小川博司編『都市青年の意識と行動—若者たちの東京・神戸 90's ; 分析篇』恒星社厚生閣, 191-212.
- Furlong, Andy, and Cartmel, Fred (2007) *Young People and Social Change: New Perspectives*, 2nd ed., Maidenhead: Open University Press. (乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳, 2009, 『若者と社会変容—リスク社会を生きる』大月書店.)
- 浜島幸司 (2004) 「経済的に成功する条件—『努力』と『才能』の違い」高橋勇悦編『都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析』2001-2003年科学研究費補助金研究成果報告書, 大妻女子大学, 375-389.
- 株式会社ユーキャン (2021) 『『現代用語の基礎知識』選 2021 ユーキャン新語・流行語大賞 年間大賞 & トップ10 発表!』, 株式会社ユーキャンホームページ (2025年5月15日取得, [https://www.u-can.co.jp/company/news/1213962\\_3482.html](https://www.u-can.co.jp/company/news/1213962_3482.html)).
- 苅谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社.
- 子ども・若者育成支援推進本部 (2021) 「子供・若者育成支援推進大綱—全ての子供・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して」, こども家庭庁ホームページ (2025年5月15日取得, [https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/09b95185-2d55-4783-a955-983b5283ccd2/3c0b681e/20231228\\_policies\\_kodomo-taikou\\_junbishitsu\\_06.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/09b95185-2d55-4783-a955-983b5283ccd2/3c0b681e/20231228_policies_kodomo-taikou_junbishitsu_06.pdf)).
- 青少年研究会 (2024) 『現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明』2019-2023年度科学研究費補助金研究成果報告書 (19H00606), (2025年5月15日取得, <http://jysg.jp/img/JYSG2022researchreport.pdf>).
- 小学館 (2021) 「第6回 大辞泉が選ぶ新語大賞」, 大辞泉公式サイト (2025年5月15日取得, [https://daijisen.jp/shingo/archive/archive\\_2021.html](https://daijisen.jp/shingo/archive/archive_2021.html)).
- 鈴木謙介 (2005) 『カーニヴァル化する社会』講談社.
- 太郎丸博 (2022) 「概説—年齢・時代・コーホート分析」『現代思想』50(16): 116-124
- 寺地幹人 (2015) 「経済的成功に対する若者の意識—2002年と2012年の比較」藤村正之編『流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究—世代間/世代内比較分析を通じて』2011-2013年度科学研究費補助金研究成果報告書, 上智大学, 79-82.
- (2016) 「経済的成功に対する若者の意識の変容—個人的な要因の衰退と非個人的な要因の台頭」藤村正之・浅野智彦・羽淵一代編『現代若者の幸福—不安感社会を生きる』恒星社厚生閣, 117-135.
- (2024) 「経済的成功に対する若者の意識の3時点比較」『現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明』2019-2023年度科学研究費補助金研究成果報告書 (19H00606), 青少年研究会, 83-85.
- (2025・近刊) 「努力主義の衰退は何をもたらすのか—『親ガチャ』の時代を生きる若者たち」辻泉・浅野智彦編『リフレクシブ・ライヴズ』勁草書房, 189-208 (頁数は予定).
- 辻泉・浅野智彦編 (2025・近刊) 『リフレクシブ・ライヴズ』勁草書房.
- 山田昌弘 (2004) 『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.

